



ロンドミース大戦



1

夏川 宙

ロンドミース大戦

第I章 《灰色平野》の会戦

1

「王子、全軍の攻撃準備が整いました！」

美しき女魔法剣士ロイドが、良くとおる声で告げた。

「分かった。——全軍攻撃開始！」

若きヒューミア王国王子ウィンサー——ゴールドとレッドのツートンの魔法鎧兜にマントという出で立ちの、長身のハンサムな白人——が、馬上で、高々と振りあげた神剣エルザイバーを振り下ろす。

ウィンサーは、左手に握ったゴールドレッドツートンの魔法盾を持ち上げて体前面を防御し、騎乗した装甲馬“スタリード”——こちらもゴールドレッドツートンの魔法具足に身を包んでいる——を、前方に展開する魔物軍ガンド兵团へ突進させる。

緑色の髪と、豪華な刺繍を施された、赤を基調としたマントがなびき、澄んだ蒼い瞳

大戦ミドロンド

が、鋭い眼光を前方に放つ。

魔法の角笛が次々と吹き鳴らされ、銀色鎧兜を装着した騎士を鞍にのせた、銀色の装甲馬約7000頭が、砂煙をあげ、地響きをたてて疾走した。

その後方には、歩兵部隊約1万が続いている。

ヒューマミア王国軍すなわち人間軍は、横列に展開した《黄金の大地》連合国遠征兵団の左から2番目に位置しており、その左隣のリザードマン軍、右隣のエルフ軍、右端のノーム軍も前進を開始している。

グングン、ヒューマミア騎兵部隊とオーガ集団先頭部隊——オーガ歩兵部隊の距離が、縮まってゆく。

「馬鹿め——ッ！ 騎兵部隊が近づけるわけがなからうが！ 全ロングボウ部隊、ヒューマミア騎兵部隊へ矢を放てッ！」

紺色鎧兜姿のオーガ、ガンド兵团総司令官兼オーガ集団司令官ガンド大將軍が、獣の唸り声のような声で命じた。

オーガアーチャー達の放った矢の豪雨が、旭日を照り返してキラキラと輝く騎兵部隊へ、降りそそぐ。

「マジックシールドネットワーク！」

黒いマジックローブを纏った、細面・白い肌のヒューマミア魔道士部隊司令官タウン

大戦ミドロンド

ゼントが、眉一つ動かさず命令を下す。

「マジックシールドネットワーク！」

こちらにも黒いマジッククロブに身を包んだ、魔道士約480名が口々に呪文を唱えるやいなや、ヒューマミア王国騎兵部隊の上方に、ライトブルーに輝く円形のマジックシールドが矢継ぎ早に出現し、隙間の無い巨大なネットワークを形成した。

矢の豪雨が、堅固なマジックシールドネットワークの傘に虚しくはじかれる。

「馬鹿なッ！ なぜ、ヒューマミア軍に魔道士部隊がいるのだッ！」

「情報が間違っていたようです」

副官のオーガ、ズバーフの額に、大粒の汗が吹き出ている。

「ええい、スパイ部隊め。なんたる失態だッ！ 全ロングボウ部隊、撃ち方やめッ！」

全歩兵部隊、ヒューマミア騎兵部隊を攻撃せよ！」

矢の群れが消滅した戦場を、剣を振りかざし、雄叫びをあげながらオーガ歩兵部隊が進む。

オーガ集団を構成する部隊種別は、オーガ歩兵部隊とオーガロングボウ部隊の2種類のみであり、騎兵部隊は擁していない。

程なくして、先頭を疾駆するスタリードに跨がったウインサーの攻撃可能圏内に、オーガ歩兵が入った。

ロンドミース大戦

「せいっ！」

神剣エルザイバーが、まるでバターでも切るように、オーガ歩兵の首を刎ねる。

赤黒い鮮血が噴き上がり、緑色の肌を持つ醜いオーガの首無し体は、黒灰色の地面に突っ伏した。

部隊の先頭に位置し、その上極めて目立つゴールドの魔法具足に身を包み一目で貴人と知れる、ウインサーは、オーガ歩兵達に格好の攻撃目標とされて集中攻撃を受けているが、全く臆する事無くエルザイバーを揮い、猛烈なスピードで前進しつつオーガ歩兵をバツタバツタと斬り倒し、次々と地獄に送ってゆく。

「マジックミサイル！」

総司令官ウインサーの副官ロイド——金髪・紺色瞳の若い白人——の美しい白い左手がブルーに輝き、ブルーの棒状エネルギーが、オーガ歩兵へ向けて射出された。

「ぎゃああッ！」

甲冑越しに胸を焼かれたオーガが、ブスブスと白い煙をたゆたわせながら仰向けに転倒し、絶命した。

ロイドも、ウインサーの近くで黒魔法と流麗な剣技を披露し続けており、ウインサー同様、すでに屍の山を築いている。

ウインサーに追従する騎兵達は、長大なランスでオーガ歩兵どもを攻撃し、負傷させ、

ロンドミース大戦

殺害し、オーガ歩兵部隊の隊列を乱している。

「散れっ！」

《氷炎のグランデル》ことヒューマミア右將軍グランデル——白い肌・銀髪の若き美丈夫。左手に“氷の盾”を握っている——が、馬上で、ブレイドから紅蓮の炎をほとばしらせる、“炎の剣”を閃かせた。

血を飛び散らせてオーガ歩兵の右腕が飛び、空中で燃え上がる。

残りの体も、灼熱した炎に包まれた。

「ぐええええええッ！」

絶叫し、地面を転げまわって消火しようとするが叶わず、オーガは黒焦げとなって事切れ、肉と金属の焦げる不快な臭いが周囲をただよった。

この間にも《氷炎のグランデル》は、5体以上のオーガ歩兵を永眠させている。
凄まじい戦闘力だ。

ウィンサー直率第1騎兵隊の右隣に位置する、《氷炎のグランデル》指揮する第3騎兵隊は、オーガ歩兵部隊の奥深くに食い込んでゆく。

「どりやつ！」

馬上の第2騎兵隊司令官、ヒューマミア左將軍タイタス——黒を基調とし紺色を配した具足に身を包んだ、巨体・筋骨隆々の若い白人が、漆黒の超巨大魔法剣“ウォーグ”

ロンドミース大戦

を軽々と振り下ろす。

「ぶっ！」

短く呻いて、真つ二つにされたオーガ歩兵が、鮮血を吹き出しながら頽くずおれれた。

「雑魚どもめ！ ガンド兵団に強者はおらんようだ」

「聞き捨てならんな。若造ッ！」

ウォーグに勝るとも劣らぬ超巨大な剣で、瞬く間にタイタス騎兵8名をあの世の住人としつつ、こちらにもタイタスを上回る巨軀のオーガ將軍、ラドングイユが駆け寄ってきた。

「ほう。名のある将のようだな」

オーガ歩兵の首を切り落として、タイタスが太い声を発した。

「ラドングイユ將軍だ。冥土の土産にするがよい！」

と、吠えるようにラドングイユ。

「俺は、ヒューマミア左將軍タイタス」

「死ねっ！」

ラドングイユが、馬上のタイタス目がけて、超巨剣を振り下ろした。

目にも止まらぬ速さでウォーグのブレイドが走り、ラドングイユの超巨剣を両断する。

「ひいっ」

ロンドミース大戦

次の瞬間、驚愕に目を見開き、緑色の顔を強張らせたラドングイユの巨大な頭部が、赤黒い体液をまき散らしながら宙を舞った。

タイタスの周囲で戦う騎兵達はパッと顔を輝かせて歓声をあげ、オーガ歩兵達は恐怖の表情を浮かべる。

「……つまらん」

何事も無かったかのような顔でそう呟いたタイタスは、巨大な装甲馬「パメラス」——タイタスの具足と同色の鎧兜を装着した、タイタスの愛馬を前進させた。

ロンドミース大陸の大部分を占めるのが、《黄金の大地》と《魍魎の地》である。

《黄金の大地》では、人間、エルフ、ドワーフ、ホビット、ノーム、リザードマン、スプリガンなどの種族が、それぞれの国家を作り、ある程度平和に暮らしている。

《魍魎の地》に関する詳しいことは知られていないが、この呪われた地には魔物が棲息しており、魔物どもは、さながら辺境の蛮族のごとく、頻繁に《黄金の大地》に住む者達を襲撃している。

エルフ族の王、《光の女王》シーナ——白い肌のとても美しいハイエルフは、上位探知魔法によって、《魍魎の地》の奥深く、極めて峻嶒なゴラ山の麓に広がる巨大な《黒き森》に、黒い輝きを放つ巨大なエネルギーゲート——ブラック・ゲートが出現した事

大戦ミドロンド

を知った。

かのゲートは魔物を次々と吐き出し続けており、ゲートから出てきた魔物どもは軍を編成して『黄金の大地』への侵略準備を進めている。

ブラック・ゲートが開かれた理由、この魔物どもの正体ともに不明だが、この魔物どもが『黄金の大地』に住む全種族を絶滅させようとしていることは分かった。

早急にブラック・ゲートを閉じなければ、魔物軍はとんでもない大軍となり、『黄金の大地』の国家は全て滅び、『黄金の大地』に住む全種族が根絶やしにされてしまう。

ブラック・ゲートを閉じる方法を手を尽くして調べたところ、人間の国ヒューマミアの王家に代々伝わる、神剣エルザイバーに秘められた特殊な力をブラック・ゲートの間近で使用する以外ない事が判明する。

シーナは、『黄金の大地』の各国に、『黄金の大地』連合国遠征兵団を編成してブラック・ゲートを閉じるための遠征を行う事を求める、檄^{げき}を飛ばした。

人間、ノーム、リザードマンの3種族が、これに応えた。

他の種族は、エルフ族との確執、シーナの主張に対する疑惑（「本当にブラック・ゲートなるものが出現したのか？」など）、策略（連合国遠征兵団が魔物軍を倒した直後に、弱っている連合国を攻撃して撃破し、自国領を拡大する策など）などの理由によって、遠征兵団に加わることを拒否した。

大戦ミースドロン

さいわいヒューマミア王国が連合国に加わったため、遠征兵団がブラック・ゲートに達しさえすれば同ゲートを閉じる事ができる状況にある。

そして、時が経つほど魔物軍は強大なものとなつてゆく。

連合国遠征兵団約5万4千は、参加4カ国内で最大の国家であるヒューマミアの軍司令官ウィンサー王子を総司令官、そして《光の女王》シーナを軍師とし、直ちにブラックゲートへの遠征を開始した。

これに対し、魔物軍は、オーガのガンド大將軍を総司令官とする、オーガ集団、オーク集団、アンデッド（ゾンビ、グールなど）集団、インセクト（昆虫型魔物）集団の4集団からなる迎撃部隊約4万2千——ガンド兵団を差し向けた。

そして、《魍魎の地》西部の《灰色平野》において、両軍は横列の布陣で対峙した。子細に言えば、連合国遠征兵団左翼側から、リザードマン族 vs インセクト集団、人間 vs オーガ集団、エルフ族 vs アンデッド集団、ノーム族 vs オーク集団という配置だ。

遠征兵団が適材適所を最優先した結果、この配置となつた。

つまり、リザードマン族はインセクトに強く、強力な白魔法を揮うエルフ族はアンデッドに強いため、この2種族の配置はすんなりと決定し、小人族であるノーム族は、大鬼であるオーガよりも小鬼であるオークの相手をした方が有利であるとの判断から、ノ

大戦ミドロンド

ーム族の配置が決まり、残った人間はオーガ集団の相手をする事となったのである。

「オーガ集団の壊滅は、時間の問題です」

ロイドが、麗しいピンクの唇から言葉を送り出した。

ヒューマニア騎兵部隊の攻撃によって隊列を乱された、オーガ集団にヒューマニア歩兵部隊がハイキルレシオの攻撃を加えたため、オーガ集団は大打撃を受け、今や風前の灯である。

「分かった。我がヒューマニア軍以外の連合国軍の戦況は、どうなっている？」

と、神剣エルザイバーを巧みに振るって獅子奮迅の活躍をした、緑髪のヒューマミア王子。

「はい。リザードマン族は……」

女魔法剣士が報告を始めた時、突然、蒼空が薄く輝く闇にすっぽりと包まれた。

空中に、巨大で不気味な黒灰色の穴が轟音と共に出現し、狂気の光を4つの瞳にたたえた、13の角を持つ恐ろしいヒュージ・ダークブルードラゴンが、翼をゆつくりと上下に動かしながら飛び出してきた。

「まさか!? あれは、封印された暗黒創世神話に登場する、《地獄の王たる大悪魔》邪神ドラゴノート!! 実在するというのか?!

ロンドミース大戦

ロイドは、震える声を喉から絞り出した。

ロンドミース大戦

本作品はフィクションであり、実在のいかなる個人・集団とも一切関係ありません。

ロンドミース大戦 1
<http://p.booklog.jp/book/68964>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/68964>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/68964>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ